内膳町（ないぜんちょう）

近鉄大和八木駅を囲む町

近鉄大和八木駅の東・西・南・北を取り囲むように、内膳町の一―五丁目が位置しています。従いまして同駅前南北の同町で開発が進みますと、新世紀を迎えた橿原市の新玄関口が姿を現します。

さて、貞和三（一三四七）年の春日大社文書に、当地名が「内善」として最初に見えます。応永六（一三九九）年の文書にも同地名で書かれたあと、天文一五（一五四六）年の興福寺関係文書で初めて「内膳」と書き換えられています。この間に地名が「内善」から「内膳」となり、その後に現地名が定着したのでしょう。中世の当地は、主に南都・興福寺支配のもとで過ごしています。

しかし、戦国時代の動乱は避けられず天正一一（一五七四）年の古文書（多聞院日記）に、当地の豪族・十市氏が「内膳の城（越智氏か）を攻撃し、城の大将ら七人の首をとった」などという物騒な記録が残っています。

「内膳村」として江戸時代を経た当地は、明治二二年に耳成村の大字となります。

昭和二四年に八木町の大字となり同三一年、橿原市発足で市域に入り同年一〇月に「橿原市内膳町」となりました。